おじいさんに魔法をかけてもらってから数日後。
―検査室にて―

「提督、検査って何をするんですか？」
（愛宕はもともと協力的だから、
魔法の力は必要ないかもしれないな）
だが、ことがことなだけに、
少し緊張する。
「・・・おしっこだ」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
こんな表情をする愛宕は初めて見た。
「あ・・・あの、愛宕さん？」
「・・・検査・・・なんですよね？」
「ああ」
「・・・信じますよ？」
そういって、愛宕は
ゆっくりと力み始めた。

「あんまり・・・見ないでくださいね？」
やはり恥ずかしいのか、頬が少し赤く染まる。
だがそれは逆効果である。
羞恥心を煽れるとなると、
余計に見たくなってしまうのだ。
ちょろちょろ・・・。
「あ・・・あぁ・・・」
ゆっくりと、
愛宕のおま◯こから、
おしっこが溢れ始めた。

じょろじょろじょろ・・・

「やぁ・・・見ないでください」

「いやしかし・・・検査だからな」

勢いを増すおしっこに併せて、

羞恥心もより強くなっているようだ。

「はぁっ・・・あ・・・」

（おおお・・・沢山でるなぁ）

「むぅ・・・」
強い羞恥心と、見ないでという お願いを
聞き入れてくれない私への怒りから、
ついには愛宕はうっすらと涙を浮かべ、
頬を膨らませた。
「提督の・・・・いじわる」
「すまん・・・・だが愛宕に
何かあると大変だろ？」
「この状況が大変です・・・」
ごもっともである。

「ぷくーっ・・・ぷいっ」
おしっこを終えても、愛宕の怒りは収まらないようだ。
「検査に必要だったんだよ、機嫌を直してくれ」
「む～・・・」
自分のためと言ってくれると怒るに怒れない愛宕は、宙に怒りを飛ばすのだった。

「提督、追加検査ですか？」
「ああ」
前回の様子だと嫌がられるかと思ったが、
愛宕はすんなりと検査椅子に座った。
「この格好・・・ちょっと
恥ずかしいですね」
しかも、協力的な姿勢を
見せてくれる。

「それでな？
今回も・・・その・・・」
「おしっこですか？」
笑顔で言う愛宕に少々驚かされる。
「提督が私達艦娘のことを
気にかけてくれること、
嬉しいですよ」
いい娘過ぎて良心が痛む。
しかし了承は得た。
「それじゃ始めてくれ」
「はーい」

「ん・・・」
愛宕が下腹部に力を込めると、
次第に黄金水が溢れ始めた。
「ふぅ・・・提督、ちゃんと
見てくださいね・・・？」

じょろじょろじょろじょろ・・・
「ん・・・んっ・・・・」
椅子を染め上げながら溢れ出るおしっこに、
思わず目を奪われてしまう。
「すごいな・・・」
「はい・・・」

なぜか満足気なような、
誇らしげなような愛宕。
「提督が見守ってくれるの・・・
嬉しいんです・・・」
「そうか・・・
ちゃんと見てるぞ」
「はぁい」

「ふう・・・」
出し切り満足気な愛宕。
あどけない表情とは裏腹に、
女性らしい丸みを帯びた体。
そしてひくついた
おま○んことアナル。
もっと見たいと思うのは
至極当然のことであった。

「次の検査だ」
ぐちゅっと音がしそうなほど、
触れた瞬間に絡みつく、アナル。
「きゃあっ」
同時に腰を跳ねさせる愛宕。
「なんですか!?」
「大丈夫、リラックスして」
「ひぐぅ!そんな・・・・・・
はぅ!できま・・・せ・・・・」

「あぁ・・・出ちゃう・・・・!」
ぷしゅぅあ。
裏側から膀胱を刺激してやると、
残っていたおしっこが浮き出し始めた。
「はぅう・・・・」

「とまり・・・ま・・・せん」
不慣れなアナルへの刺激と、
排泄による快感、
見られてることへの羞恥による興奮。
「やぁ・・・や・・・・・あ・・・ひんっ！」
あまりの快楽に、
愛宕はだらしない表情を
しながらも受け入れる
ことしかできなかった。

ぬぽんっ。
アナルから強めに指を抜いた。
「ひぐうう！」
愛宕は絶叫に近い声とともに、
腰を大きく跳ね上げた。
「はぁっ・・・はぁっ・・・はぁっ」
朦朧とした表情で、
股間から最後のおしっこを
垂れ流す。

「はぁあ・・・はぁ・・」
肩で息をしながら余韻に浸っている。
「大丈夫か？」
「はひぃ・・・」
ぐっしょりと濡れた
股間と椅子を眺めながら
愛宕の回復を待つ。

「ぷくぅー」
やや回復した愛宕は、
上気した顔のまま頬を膨らませた。
「・・・やりすぎです！」
「・・・すまん」
謝るしかなかった。
「・・・他の子には、
こんなことしないでくださいね！」

「・・・愛宕にはしていいのか？」
そっと触れてみる。
「・・・いい加減にしないと、本当に怒りますよ。・・・？」
「ごめんなさい」
「・・・また今度なら・・・・・・・・いいですよ」

―仮眠室―

「。。。すごい格好だな」

大きめなお尻を突き出す形で、

枕を抱きしめながら眠る

愛宕の姿があった。

「すー・・・す・・・」

あどけない寝顔と寝息に併せて、

それと不釣り合いな豊満な

肉体が上下する。

「てーとくぅ・・・」
（ん？）
どうやら私の夢を見ているらしい。
「まーた・・・おしっこ・・・？・・・みたいんですかぁ・・・」
いいですよぉ・・・」
今の私の気持ちを、夢の中の
私が代弁してくれているようだ。

「ん・・・」
ぷしゅあ。
お尻が少し揺れたかと思うと、
突然おしっこが漏れ出した。
（おお・・・）
「んふ～・・・ちゃんと、
見てくださいね・・・」

じょろじょろじょろ・・・。
黄みがかった、大きなシミが出来上がっていく。
「ふう～・・・遠慮しなくていいんですよ・・・？私も見られるの・・・すごい気持ちいいんです」
（！？）
いつの間にか、見られる快感に嵌ってしまっていたようだ。

「はぁ・・・終わっちゃったぁ・・・」
名残惜しそうに、自分の放尿の
終わりを告げる愛宕。
「また・・・いつでも・・・
言ってくださいね？
次もちゃんと見てくださいね？」
夢の中で約束を交わす私と愛宕。

「ふぇっ？」
湿った布団に異変を感じたのか、
愛宕はゆっくりと瞼を上げる。
「・・・おはよう」
「・・・あれ？提督・・・
おはようござ・・・」

「！」
意識がはっきりし、状況を理解したのか、
みるみるうちに愛宕は顔が真っ赤になった。
「や・・・提督、これは違うんです！」
「約束は守るぞ愛宕」
「ふぇえ！」

寝言まで聞かれていた恥ずかしさで、
真っ赤な顔に涙が加わった。
「違うんです！提督に見てもらってたのは、
検査で・・・！あそこが熱くなるとか
気持ちよかったとかそういうんじゃ
なくて・・・！」
墓穴を掘っていく愛宕。
「見られて感じてたのか？」
「ひぐぅ！」

ぷしゅっ！
「きゃぁ！」
動揺しすぎたのか、
2度めのおしっこが始まった。
「約束通りちゃんと見てやるぞ」
「ちがっ・・・あっ・・・」

ぷしゃあああああ。
「あぁっ・・・はぁ・・・」
一度出始めたおしっこは
止まるどころか勢いを増した。
「あっ・・・あ・・・」
恥ずかしがりながらも、
しっかりと見られることによる
快感を覚えている愛宕。

「はぁ・・・はぁ・・・」
「よかったぞ、愛宕」
「～～～～～！」
羞恥心が限界を超えたようだ。
「・・・・・・」
「・・・提督」
「・・・また・・・見てくださいね・・・？」

―数ヶ月後―
『ぱんぱかぱーん♪
提督、今日は洗面所で出しちゃいまーす♪』
すっかりおしっこを
見られることが好きに
なってしまった愛宕は、
近くに居ないときは
自撮りの映像を
送ってくるようになった。

「ちゃんと見てくださいよ？
それじゃ・・・いきますね♪」
指で大事な秘部をゆっくりと広げる。
「えへへ・・・もうちょっと湿っちゃってます」

「んっ・・・」
懸命に力む愛宕。
「んん～・・・」
ぷしゅぅっ。
勢い良くおしっこが飛び出していく。

じょろじょろびちゃびちゃびちゃ。
洗面所という、いつもと違う場所のせいで、
鳴り響く音も違う。
「ん・・・あ・・・」

恍惚とした表情で、放尿を続ける愛宕。
おしっこの標準も定まらず、
洗面台に撒き散らしてしまっている。

「提督、ちゃんと約束、守ってくださいね♪」
軽くイッてしまったかのように、上気した顔で念押しをしてくる。
「よかったよ」と返信。
すると、愛宕からもう一通。
「次は、どんなおしっこが見たいですか？」
・・・次が楽しみだ。